

臨床心理学専攻の学生が保育士資格を取得すること についての一考察

三 林 真 弓

I. 問題提起

臨床心理士が昨今注目している職域として「子育て支援」がある。子育てといえは、家庭なら親、社会なら保育士や教員といった立場のものがおこなうのが主流であろう。笠原 (2004) は、「保育士は、子育てに悩んではいるが、まだ専門機関にかかっていない親と接する機会が比較的多く、かかわりを持ちやすい最初の専門家であると言える。」と述べている。つまり、保育士は、親にとって臨床心理士に出会う前の専門家といっても良い。このような現状からか、本学臨床心理学部の学生たちも臨床心理士だけでなく、保育士の資格にも関心を持ち、保育士試験に挑戦する者が増えている。保育士は国家資格である。児童福祉法第 18 条の 4 によれば、「保育士とは、第 18 条の 18 第 1 項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう。」と定義されている。保育士の資格は、国家試験でも珍しく、ふた通りの方法で取得できるものとなっている。まずひとつめは、厚生労働大臣の指定する「指定保育士養成施設 (大学・短大・専門学校)」等に通い、所定の単位を取得し、卒業することであるが、ふたつめの方法は都道府県が実施する全国統一の保育士試験に合格することである (ただし、平成 15 年 11 月 29 日からは、改正児童福祉法の施行により、保

育士と称して保育の業務をおこなうためには、どちらの方法で資格を取ったとしてもさらに都道府県に保育士登録をおこなう必要がある)。

実際に保育士として業務に携わる者のうち、9 割がひとつめの方法で取得した者たちであり、保育士試験を受験した者は 1 割といわれている。本学部の学生たちは、ふたつめの方法で保育士を目指している。忙しい学生生活のなかから学習時間を捻出するのは大変なことと思われるが、それに向かう気持ちはいかなるものであろうか、また、実際に学生たちが取り組んでいる試験とはいったいどのような内容のものであろうか。臨床心理学にも近い内容の科目もあれば、全く心理学を基本としないような専門内容も知識として入れておかねばならないかもしれない。それらを知ることは、「子育て支援」に後進で参入した臨床心理士にとっても必要なことであると思われる。

本論ではまず、保育士試験の内容の紹介とともに現場の保育士に求められている資質について考察し、保育士と臨床心理学との関連について論ずる。さらに、2010 年 8 月におこなわれた保育士試験を受験した自主勉強会のメンバーの学生たちの声をまとめて報告したい。

II 保育士と臨床心理学との関連

1) 保育士試験について

保育士試験は、筆記試験及び実技試験によっ

ておこなわれる。筆記試験は、以下の8科目である。

1. 社会福祉
2. 児童福祉
3. 発達心理学及び精神保健
4. 小児保健
5. 小児栄養
6. 保育原理
7. 教育原理及び養護原理
8. 保育実習理論

各科目の出題内容を表1にまとめた。「1. 社会福祉」は、社会福祉の理念と概念が問われ、ヨーロッパや日本におけるその歴史について理解し、法律や人名などを覚えなければならない。また、社会福祉サービスの動向なども知っていなければならないし、心理カウンセリングとは違った意味合いの対人援助職のための面接技術の知識が必要である。「2. 児童福祉」は、児童を対象とした福祉の理念が問われ、欧米におけるその歴史的展開もおさえておかないといけない。児童福祉法に基づいた問題が多く、児童福祉のための諸機関についての事項が問われる。「3. 発達心理学」は、実際には生涯発達というよりもやはり乳幼児期の発達について多く出題されている。エリクソンやピアジェなどの発達理論も詳細に覚えなければならない。『保育所保育指針』が平成21年に改定されてからは、子どもの発達と発達のおもな特徴について、年齢の区切りがよく問われている。「3. 精神保健」は、大脳生理学的な問題から発達障害、子どもの神経症的な症状や発達障害者支援法などの法律や制度など出題範囲が多岐にわたる。平成22年の試験では、事例が示され診断名を問うような出題が多かった。「4. 小児保健」は、赤ちゃんの発育の特徴や予防接種の種類、子どもの事故などの出題が多く、実際に出産・子育て経験のある者は非常に身近な内容である。合計特殊

出生率などの近年の動向や、『保育所保育指針』の健康・安全に関する事項についても問われる。「5. 小児栄養」は、妊娠・授乳期など母親のための食生活から、乳幼児期・障害を持つ小児のための食生活についても問われる。『食事摂取基準』が平成22年度から新しく変わったことで、基準値や年齢区分などの変更点を中心に細かなデータが問われる。例年難問が多く、クリアしにくい科目のひとつである。「6. 保育原理」は保育所の保育について本質的なところが問われる。モンテッソーリやフレーベルといった歴史的人物の功績や著作の文章などもおさえておかなければならない。他の科目と重なる部分もあるが、本科目で最も『保育所保育指針』の語句の穴埋め問題が多い。全文を何度も読み理解しておく必要がある。「7. 教育原理」は国内外の教育の歴史や法律・制度の知識が問われる。具体的な学習の教授法や最近の教育問題、生涯学習といったような内容も問われる。「7. 養護原理」は、児童憲章や児童の権利に関する条約などの文章や制定年などが問われる。また、児童養護施設や里親制度などの統計的データや動向も知識として必要である。児童虐待関連についても本科目で問われる。「8. 保育実習理論」は保育所保育の際の最も実践的な音楽・絵画・言語といったスキルについての知識が問われる。よって、ピアノなどの習い事をしていたり、絵画教室に通っていた経験のある者は得意であろうし、そうでない者にとってはかなり難解であろう。また、『保育所保育指針』の“表現”と“言葉”に関する内容が発達過程ごとに問われたり、『児童福祉施設最低基準』について各施設の微妙な違いを問われるたりするため、詳細に覚えねばならない。

配点は、各科目とも100点満点であり、「3. 発達心理学及び精神保健」と「7. 教育原理及び養護原理」の2科目で1セットとなっている試

表 1. 筆記試験科目の出題内容

出題の基本方針	出題範囲	出題の基本方針	出題範囲
<p>社会福祉全般に関して、その理念体系を理解しているかを問うことを基本とする。問題選択に当たっては、我が国の社会福祉の体系を概括的に理解しているかという点のほか、その背景となっている社会の動向、社会保障等の関連の深い制度の概要、制度の歴史的展開等の点についても留意する必要がある。</p>	<p>1 現代社会と社会福祉の意義 (1) 社会福祉の理念と概念 (2) 社会福祉の対象と主体 (3) 社会福祉ニーズの変容 (4) 社会福祉の発展 2 社会福祉の法体系と実施体系 (1) 社会福祉法制の体系 (2) 社会福祉のサービス実施体系 (3) 社会福祉サービスの評価と情報提供 (4) 社会福祉の財政と費用負担 (5) 社会福祉サービスにおける公私の役割 (6) 社会保障及び関連制度の概要 3 社会福祉援助技術の概要 (1) 社会福祉援助技術の発展経緯 (2) 社会福祉援助技術の形態と方法 (3) 社会福祉援助活動の動向 4 社会福祉専門職 (1) 社会福祉従事者の概要 (2) 社会福祉従事者の専門性と倫理 (3) 保健・医療関係分野の専門職との連携 5 社会福祉の動向 (1) 少子高齢社会への対応 (2) 在宅福祉・地域福祉の推進 (3) 社会福祉基盤構造改革の進展 (4) ボランティア活動の推進 (5) 諸外国の動向 6 利用者保護制度の概要 (1) 第三者評価 (2) 苦情解決 (3) 権利擁護 (4) 情報提供</p>	<p>個々の小児と集団を形成した場合の小児各時期の健康についての理解と健康増進や疾病異常に対する対応への理解を問うことを基本とする。問題選択に当たっては、身体面のみならず心の健康についての理解や各種の保健対策、安全対策等についても留意する必要がある。</p>	<p>1 小児の健康と小児保健の意義と目的 (1) 小児の健康の定義と健康に影響する要因 (2) 小児の健康と保育との関係 (3) 小児の健康と家庭・地域の関連 (4) 小児の健康指標と小児保健水準 2 小児の発育・発達と生活の支援 (1) 身体発育の特徴とその評価 (2) 精神運動機能発達の特徴とその評価 (3) 生理機能と小児の生活 (4) 発育・発達を促す保育の実際 3 小児の食生活と栄養 (1) 小児の栄養の意義 (2) 小児各時期の食生活の実際 4 心身の健康増進の意義とその実践 (1) 小児各時期の健康づくりの意義 (2) 小児各時期の健康づくりの実践 5 小児の疾病とその予防対策 (1) 小児期の健康状態の評価 (2) 小児の疾病の特徴と小児期に多く見られる疾病 (3) 心身の状態と保育現場で必要な応急処置 (4) 予防接種 (5) 養育上問題と心身の健康 (6) 疾病異常と支援体制 6 事故と安全対策 (1) 小児の事故の特徴 (2) 事故と心身の被害と救急処置 (3) 事故防止対策と安全教育 (4) 事故や災害と精神保健 7 児童福祉施設における保健対策 (1) 児童福祉施設における保健活動の基本的方針 (2) 各種の児童福祉施設の特徴と健康管理の実際 (3) 保健活動における連携 8 母子保健対策と保育 (1) 地域母子保健の意義 (2) 母子保健サービスの実際 (3) 母子保健サービスと保育との連携</p>
<p>児童がおかれている現状とこれに対応して行われている現在の児童福祉制度及びその役割を体系的に理解しているかを問うことを基本とする。問題選択に当たっては、我が国の児童福祉の理念・制度の体系を概括的に理解しているかという点のほか、児童及びそれをとりまく環境の状況、児童福祉従事者の状況、児童福祉に係る相談援助活動の点についても留意する必要がある。</p>	<p>1 児童福祉の意義とその歴史的展開 (1) 児童福祉の概念 (2) 児童福祉の理念 (3) 現代社会と児童 2 わが国の児童福祉に関する制度と福祉機関・施設 (1) 児童福祉に関する法律 (2) 児童福祉の制度 (3) 児童福祉の機関 (4) 児童福祉の施設 (5) 児童福祉の費用 3 児童福祉の現状と課題 (1) 少子化と子育て支援サービス (2) 健全育成 (3) 母子保健 (4) 保育 (5) 養護と虐待の防止 (6) 障害児 (7) 少年非行・情緒障害 (8) ひとり親家庭 (9) 現代の児童福祉の課題と展望 (10) 諸外国の現状 4 児童福祉の実際と児童福祉従事者 (1) 児童福祉の専門職 (2) 児童福祉の専門援助技術 (3) 児童福祉サービス関連機関との連携 5 相談援助活動</p>	<p>小児栄養の基本的理論を体系的に理解しているか、特に保育の実際との関連において実践的な知識・理解となっているかを問うことを基本とする。</p>	<p>1 小児の健康な生活と食生活の意義 (1) 小児の心身の健康や生活と食生活の関係 (2) 家庭・地域における食生活の実際と小児の食生活 2 小児の発育・発達と食生活 (1) 身体発育・精神運動機能発達と栄養・食生活 (2) 食べる機能・消化吸収機能発達と栄養・食生活 3 栄養に関する基本的知識 (1) 栄養素、栄養生理、代謝に関する基本的知識 (2) 栄養所要量の意義とその活用 (3) 小児の集団生活と献立作成・調理の基本 (4) 栄養状態の評価 4 妊娠・授乳期の食生活 (1) 妊娠のメカニズムと正常な妊娠の食生活 (2) 母乳分泌と母乳分泌促進の食生活 (3) 妊娠・分娩の異常と食生活 (4) 胎児と食生活 5 乳児期の食生活 (1) 乳児期の心身の特徴と食生活の関係 (2) 乳汁栄養(母乳栄養・人工栄養・混合栄養) (3) 離乳の意義とその実践 (4) 乳児期の栄養上の問題と健康への対応 6 幼児期の食生活 (1) 幼児期の心身の特徴と食生活の関係 (2) 幼児期の食生活の特徴とその実践 (3) 間食の意義とその実践 (4) 幼児期の栄養上の問題と健康への対応 7 学齢期・思春期の食生活 (1) 学齢期・思春期の心身の特徴と食生活 (2) 学齢期・思春期の具体的な食生活 (3) 学校給食と栄養教育 8 小児期の疾病と食生活 (1) 小児の疾病の特徴と食生活 (2) 摂食障害と食生活のあり方 (3) 症状別の食生活 (4) 食餌療法 (5) 不適切な食生活と健康障害 9 障害をもつ小児の食生活 (1) 障害の特徴と食生活 (2) 障害児の食生活の実際 10 児童福祉施設における食生活 (1) 児童福祉施設の特徴と食生活の基本 (2) 児童福祉施設の給食の基本的方針 (3) 食事による健康障害とその予防 (4) 栄養・食生活に関する教育や指導</p>
<p>発達の基本原則、胎児期から老人期までにおける発達期の特徴及び各々の発達段階における心理構造の特徴、乳幼児期における発達援助のあり方、特に保育の実際との関係において十分に把握できているかを問うことを基本とする。</p>	<p>1 発達心理学の方法と考え方 (1) 何のために発達心理学を学ぶか (2) 一人一人の子どもの発達を正確にとらえる必要性 (3) 人間の発達を「ライフサイクル」的な視点からとらえた「発達段階」 2 初期経験の重要性 (1) 知能・性格・感情の基本を形成する乳幼児期の経験 (2) 野生児の事例、動物実験の事例からみた発達の課題 3 発達期の特徴 (1) 胎児期 (2) 新生児期 (3) 乳児期 (4) 幼児期 (5) 児童期 (6) 青年期 (7) 成人期から老人期 4 乳幼児期における発達援助のあり方</p>	<p>小児栄養</p>	<p>小児の健康と小児保健の意義と目的 (1) 小児の健康の定義と健康に影響する要因 (2) 小児の健康と保育との関係 (3) 小児の健康と家庭・地域の関連 (4) 小児の健康指標と小児保健水準 2 小児の発育・発達と生活の支援 (1) 身体発育の特徴とその評価 (2) 精神運動機能発達の特徴とその評価 (3) 生理機能と小児の生活 (4) 発育・発達を促す保育の実際 3 小児の食生活と栄養 (1) 小児の栄養の意義 (2) 小児各時期の食生活の実際 4 心身の健康増進の意義とその実践 (1) 小児各時期の健康づくりの意義 (2) 小児各時期の健康づくりの実践 5 小児の疾病とその予防対策 (1) 小児期の健康状態の評価 (2) 小児の疾病の特徴と小児期に多く見られる疾病 (3) 心身の状態と保育現場で必要な応急処置 (4) 予防接種 (5) 養育上問題と心身の健康 (6) 疾病異常と支援体制 6 事故と安全対策 (1) 小児の事故の特徴 (2) 事故と心身の被害と救急処置 (3) 事故防止対策と安全教育 (4) 事故や災害と精神保健 7 児童福祉施設における保健対策 (1) 児童福祉施設における保健活動の基本的方針 (2) 各種の児童福祉施設の特徴と健康管理の実際 (3) 保健活動における連携 8 母子保健対策と保育 (1) 地域母子保健の意義 (2) 母子保健サービスの実際 (3) 母子保健サービスと保育との連携</p>

表1 (つづき). 筆記試験科目の出題内容

出題の基本方針	出題範囲	出題の基本方針	出題範囲
発達段階及びその特質を基本的に理解した上で、それから外れた行動を示す児童について、正しい理解と取扱いができるかどうか、また、保育等の実際と関連して精神保健の意義及び目的を理解しているかどうかを問うことを基本とする。	<ol style="list-style-type: none"> 小児の精神機能発達と精神保健 <ol style="list-style-type: none"> 精神発達と脳神経系器官の成熟 心の健康に影響する要因 小児の生活環境と精神保健 <ol style="list-style-type: none"> 家族関係と小児期の精神保健 文化・教育環境と小児期の精神保健 社会環境と小児期の精神保健 小児各時期の精神保健 <ol style="list-style-type: none"> 身体と精神保健の関係 乳児期の精神保健 幼児期の精神保健 学齢期の精神保健 思春期の精神保健 <p>小児の心の健康障害</p> <ol style="list-style-type: none"> 小児各時期の精神障害の特徴 心の健康障害と小児の養育のあり方 <ol style="list-style-type: none"> 小児期の精神保健活動 <ol style="list-style-type: none"> 精神医学と保育の連携 子育て支援対策と心の健康づくり 児童福祉施設における心のケア 地域精神保健活動と保育 	教育に関する基礎的な概念、教育活動における実践原理を体系的に理解しているかを問うことを基本とする。	<ol style="list-style-type: none"> 教育の意義、目的及び児童福祉との関連性 <ol style="list-style-type: none"> 教育の意義と目的 教育と児童福祉の関連性 教育の基礎的な概念と諸理論 <ol style="list-style-type: none"> 諸外国の教育理論 日本の教育理論 幼児教育の理論 教育の歴史 <ol style="list-style-type: none"> 諸外国の教育史 日本の教育史 子どもと教育観の変遷 教育の制度 <ol style="list-style-type: none"> 教育制度の基礎 教育法規・教育行政の基礎 諸外国の教育制度 教育の実践 <ol style="list-style-type: none"> 教育の内容 教育の方法 教育指導の原理と形態 生涯学習社会における教育 <ol style="list-style-type: none"> 生涯学習の基礎 生涯学習社会における教育 現代の教育問題
	保育所の保育を体系的に理解しているかを問うことを基本とする。問題選択に当たっては、地域の子育て支援や多様な保育ニーズへの対応、保育サービスの評価、家庭、地域との連携など保育を巡る現代的課題についても配慮が必要である。		<ol style="list-style-type: none"> 保育の本質 <ol style="list-style-type: none"> 保育の意義とその思想 保育の目標 子どもの発達特性 保育の原理 保育の場 <ol style="list-style-type: none"> 家庭 保育施設 家庭的保育 保育の歴史と現状 保育所保育の原理 <ol style="list-style-type: none"> 保育の特性 保育の目標 保育の方法 保育の環境 保育所保育の内容 <ol style="list-style-type: none"> 保育の内容構成の基本方針 ねらい、内容、領域 保育所保育の計画 <ol style="list-style-type: none"> 保育の計画作成上の基本的視点 保育計画と指導計画 保育の計画作成上の留意事項 発達過程区分の保育の内容と指導計画 <ol style="list-style-type: none"> 3歳未満児の保育の内容と指導計画 3歳以上児の保育の内容と指導計画 保育所の健康・安全上の留意事項 <ol style="list-style-type: none"> 健康上の留意事項 安全上の留意事項 多様な保育ニーズへの対応上の留意事項 <ol style="list-style-type: none"> 入所児童の多様な保育ニーズへの対応 地域における子育て支援 子育てに関する相談援助活動 <ol style="list-style-type: none"> 「家族」における現代的課題と支援 子育て支援ニーズと相談援助活動 相談援助の基本原則 保育所における相談援助活動 地域における相談援助ネットワーク 保育サービスの評価と苦情解決 <ol style="list-style-type: none"> 保育サービスの評価 保育サービスに対する苦情解決 職員の研修と資質の向上 家庭、地域との連携 <ol style="list-style-type: none"> 保育における連携の意味 家庭との連携 幼稚園との連携 保育士の資質と任務
<ol style="list-style-type: none"> 保育等に関する教科全体の知識・技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力を問うことを基本とする。保育実習理論 		<ol style="list-style-type: none"> 保育所保育 <ol style="list-style-type: none"> 保育の計画 保育形態 デイリープログラム 保育内容 <ol style="list-style-type: none"> 健康 人間関係 ウ環境 エ言葉 オ表現 生活指導 <ol style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣 イ安全教育 ウ社会性の涵養 入所施設の処遇 <ol style="list-style-type: none"> 乳児院の養育 児童養護施設の養護 肢体不自由児施設、知的障害児施設等の療育 その他の児童福祉施設の処遇 	
		(出典：厚生労働省 web の「保育士試験出題範囲」を一部省略して作成)	

験は、1科目ごと各50点満点で1セットが100点満点になるようになっていて、どの科目も6割以上の正解でその試験が合格となり、セットになっている試験はどちらの科目も6割以上の正解が求められる。

また、1年目の受験で合格した科目は、2年目、3年目の受験では免除される。つまり、1発合格しなくとも、3年間のうちにバランスよく合格を重ねて取得する方法もあるのである。

一方、実技試験は、筆記試験のすべてに合格した者についておこなわれる。「音楽」と「絵画制作」、「言語」の3分野からあらかじめ出題され、そのうちのふたつを選択して受験をする。平成22年は、「音楽」の課題曲が『とんでったバナナ』と『ちょうちょう』の2曲の弾き歌いで、幼児に歌って聴かせることを想定しての実技であった。「絵画制作」は、『保育所（園）での子どもたちと保育士との活動の一場面を表現する。』という課題で、色鉛筆を持参して45分間のうちに制作するものであった。「言語」は、自分の前にいる20人程度の3歳児クラスの幼児に集中して話を聴かせる時間という想定のもと、各自あらかじめ用意をした童話などを3分以内にまとめて話をするというものであった。1分野が50点満点で、どちらも6割以上の得点であったときに実技試験合格となる。平成22年の京都府の実技試験では、「言語」を選択した者が最も多く、次いで「音楽」、「絵画制作」の順であった。

例年8月上旬の土日に筆記試験が、10月中旬の日曜日に実技試験がおこなわれる。平成22年の京都府では、筆記試験会場が同志社大学の京田辺キャンパス、実技試験会場が京都文教短期大学であった。

保育士試験の受験者動向であるが、厚生労働省のwebによると、前年（平成21年）の受験申請者数は、41,163名であり、最終合格者は、

5,204名（合格率12.6%）であった。毎年、科目ごとの合否の割合や都道府県ごとの動向など細かなデータは示されておらず、若干不透明な部分があるともいえる。また、保育士は厚生労働省の管轄であるが、社団法人全国保育士養成協議会が全国都道府県の“保育士試験”指定機関として全面実施している。よって、受験の手引きの取り寄せなどは協議会のwebを参考にすると良い。

斉藤・吉見（2001）は、当時（平成12年）、各都道府県でおこなわれていた保育士試験科目を用いて保育所所長等にアンケート調査をすることにより、保育士に求められる専門性を試験科目ごとに分析した。その結果、現場の保育者が最も必要であると感じている科目は【児童心理】であった。当時の科目構成であるので、今現在は置かれていないが、【発達心理学】や【精神保健】に通じるものがあるであろう。また、この調査での調査対象者の属性において、保育士資格を取得した方法の内訳が示されていた。保育士の養成校で所定の単位を取得したものは69.6%、各都道府県の保育士試験に合格したものが26.8%、そのほかが3.6%であった。対象者は、保育園の園長もしくは主任などの現場でも指導的立場にいる人たちである。そのような人たちのなかにも保育士試験による資格取得者が活躍していることから、保育士試験の重要性がうかがわれる。

2) 保育士に求められている資質

永井・松田・加藤・林・佐伯（2003）は、保育士と幼稚園教諭の虐待に対する関心と認識の高さについて調査した。その結果、いずれも虐待に対する関心は高いものの、必ずしも正しい認識には結びついていないことが明らかとなった。ただし、保育士のほうが幼稚園教諭に比べ被虐待児の保育経験が高く、虐待の認識の割合

も高かった。このことから、保育所・幼稚園とも就学前の子どもたちを預かる施設であったとしても、その質の違いから、保育所のほうが福祉的にも心理的にも困難さを抱える子どもたちが多く存在していることがみえてくる。

早坂(2007)は、の現場の保育士へインタビュー調査をおこない、保育現場の「気になる子」のなかには、発達障害だけではなく、愛着の問題や環境要因による関係性の障害の徴候を示す子が存在していることを確認した。しかし、保育士は「気になる子」と捉えているものの、そのような子どもたちに適切な対応をとっていない可能性が示唆された。これは、積極的に“とっていない”というより、それに関する知識を持ち合わせないために適切な対応が“とれない”ということかもしれない。

浅見(2000)は、「園長が望む保育者の資質」と「現任保育者の求める保育者の資質」について、それぞれ幼稚園園長と現任の幼稚園教諭に対し、自由記述の調査をおこなった。前者の結果では、①学識・研究的態度(31%)、②人格・人柄・性格など(24%)、③子どもへ向かう姿勢(12%)、④健康・健康的(11%)、⑤社会常識・マナー(7%)などが挙げられた。後者の結果では、①子どもとの関わり(33%)、②明るい(14%)、③健康・元気(10%)、④優しさ(8%)、⑤知的センス(7%)、前向きな姿勢(7%)などが挙げられた。幼稚園園長は、教育的な社会人としての資質を、また現任の幼稚園教諭は、はつらつとした母性的な資質を求めているようである。

矢持・白石・村上・富田・谷川・坂之上・伊藤・近藤・野田・菅田(2003)は、4年制大学での幼稚園教諭や保育士養成について、現場(山口県内の保育園・幼稚園)の人たちが4年制大学卒を求めているかどうかを調査した。その結果、採用について幼稚園・保育園ともに賛成が7割

近くを占めた。つまり、4年制養成校卒業者の採用については公立・私立園ともに賛成傾向にあり、採用の条件としては、知識・技術的な面よりも、仕事に対する意欲や情熱、周りの職員との協力、協調性を重視する傾向がみられたのである。また、県の保育士試験や通信教育等での資格取得の採用は、幼稚園では公立・私立園ともほとんどないが、保育園においては公立・私立を問わず4年制養成卒業者とほぼ同数で採用されていた。

江田(2007)は、現場の保育士や養成大学の学生に「保育士に求められる資質能力」として10領域を設定し、調査をおこなった。その結果、「子どもへの思いやりや願いを的確に捉える洞察力」、「子どもの成長・発達に関する理解」、「子どもへの愛情」、「保育士としての使命感」などが見いだされた。これらのうちのはじめのふたつについては、児童心理・発達心理をベースにした資質ともいえるであろう。さらにいえば、そのような能力はノーマルな子どもたちを観察する力というよりも、“気になる子”と呼ばれるような子どもたちにこそ発揮されることが期待される能力でもあり、臨床心理とも密接に結びついているといえよう。

藤村(2010)は、保育士として学力や技能は重要な資質としながらも、実際の乳幼児の保育や教育の現場においては、これらの技量がどのように生かされるかは技量以外の個人のパーソナリティ特性のあり方に依存すると考え、保育者適性尺度を作成した。その結果、7つの下位尺度(『愛他性』、『共感性』、『論理的思考性』、『気働き』、『社交性』、『行動力』、『養育性』)が見いだされた。なかでも、保育士養成系の大学での調査データでは、『共感性』の得点が最も高かった。共感できる能力はいわずもがな、カウンセラーにとっても大切な資質のひとつとして挙げられる。

田村・浜崎・岩崎・荒木（2004）は、さまざまな子育て支援活動が実際に保育者自身にとって望ましい影響があると認識されているのか否かという問題に注目し調査をおこなった。その結果、「園舎・園庭の開放」や「子育て情報の提供」、「未就園児への保育サービス」などの活動を押さえて最も望ましい影響があると認識されていたのは、「育児相談」であった。「育児相談」によって、保育者自身の子ども理解、保護者との関わり、家庭との連携において望ましい影響があると比較的強く認識されているということである。これは、まさに保育者がカウンセリングの技術を持ってこそ生かされるといえるだろう。

これらのことから、保育士に求められている資質は、現代の家庭環境や子どもの状態などを踏まえ、臨床心理学との関連が深いといえる。具体的には、特別支援や心理面での正しい知識を持ち子どもを見立てることができること、子どもや保護者の内面に丁寧に向き合うことができ、愛情を持って接することができることが明らかとなったといえるであろう。幼稚園教諭や小学校教諭は、集団を相手にすることを前提としている免許である。つまり、対象がまずはクラス運営などの集団なのであるが、保育士は、あくまで個人を相手にする資格である。そのところでも、臨床心理士と共通するものがあるであろう。また、先行研究では、保育所（園）を現場としている保育士について、このようなことが見いだされたが、さらにいえば、他の児童福祉施設（児童厚生施設・児童養護施設・児童自立支援施設・児童家庭支援センター・助産施設・乳児院・母子生活支援施設・知的障害児施設・知的障害児通園施設・盲ろうあ児施設・肢体不自由児施設・重症心身障害児施設・情緒障害児短期治療施設）に勤務する保育士こそ、これらの資質がより求められる職場であるとい

えるのではないだろうか。

Ⅱ. 保育士勉強会と質問紙調査

1) 勉強会の立ち上げの動機と運営状況

今年度に入ってから、ゼミなどを通して筆者の周りの学生たちが保育士の資格に関心が高いことが見受けられた。保育士試験を受けようとする学生がいるのは例年のことと変わらないが、「受けてみたいのだけれど、どのように勉強したらいいかわからない」というとまどいのなかにいる学生もちらほらいた。一方で、昨年度末に学内でおこなわれた保育士資格取得のセミナーに参加した学生などは、着実に受験モードに入っており、頼もしい存在であった。筆者は、これはおもしろいと思いついた。紀貫之風というとするなら“学生のすなる保育士試験というものを教員もしてみんとてすなり”。自らも受験生となって保育士試験のための勉強会を立ち上げ、彼らをつなごうと考えた。もちろん、筆者も全く受験態勢ゼロの地点にいる人間である。ただ、受験勉強のスタート地点に違いのある者たちを集めたら、すでに勉強している者たちが最初はリードしてくれるに違いない、その手本を見ながら、お互いに切磋琢磨できるような勉強会を運営していこうと考えたのである。筆者の担当する各学年のゼミ生を中心に声をかけをし、今年（2010年）の受験を考えている学生たちを集めた。なかには、勉強会が始まってから、その存在を伝え聞いて参加を希望する他ゼミの学生もあつたり、途中までは受験しようと思っていたものの願書の取り寄せに間に合わなかったり、就職活動などで今年の受験は見合わせようとした者などもあつて、若干の変動はあつた。学年も、学部の3回生から大学院のマスター2回生まで幅があり、一堂に会して集まることのできる時間帯を設けるのは困難であつ

た。よって、8月の試験までの勉強会スケジュールをまずはじめに話し合っただけ、週に3回程度の時間を設け、集まれる人たちが集まって進めるようにした。隔週の勉強会では、担当者を決めて、その科目の問題を作成し解説もおこなってもらった。問題や解答のプリントは、参加の人数にかかわらず、メンバー分コピーして準備してきてもらい、それらのプリントは、欠席したメンバーにも後日配布できるようにした。また、メーリングリストを作成し、勉強会の運営に用いたり、情報交換をしたり、士気を高めるためにやりとりができるようにしたりした。

2) 調査の目的

勉強会のメンバーとして、ともに受験した学生たちの保育士試験に臨む動機や目的を明らかにする。また、彼らの受験体験についてまとめ、臨床心理学専攻の学生が保育士を取得することについて考察する。

3) 調査の方法

- ①調査方法 質問紙調査法による。
- ②調査時期 保育士試験がすべて終了した2010年12月上旬
- ③調査対象者 おもな勉強会のメンバーであった12名の学生に配布し、回収できたのは10名であった(男性2名、女性8名)。10名のうち2名は2年目の受験であった。
- ④調査内容 筆記の10科目について、それぞれ「大いになじみがある」(7点)から「全くなじみがない」(1点)まで7件法で評定してもらった。また、「受験の動機」、「資格取得の計画」、「試験科目の得意・不得意」、「2010年筆記試験の感想」、「勉強会の感想」、「本学科の学生が保育士を取得することについての意見」、「保育士以外の関心のある資格

について」をおもに自由記述でたずねた。なお、本調査以前の段階で各メンバーの試験の合否科目については聴き取り済みであった。

4) 結果と考察

まず、10科目についてのなじみのある程度を評定してもらった結果について、各科目ごとの平均値を図1に示した。【発達心理学】は満点(7点)を示し、ついで【精神保健】が6.7点であった。やはり実際に学部の授業科目として組まれている科目であるので、なじみがあるといえるのであろう。この2科目は、先述した斉藤ら(2001)から考えると、現場の保育者たちが最も必要であると感じている科目群である。よって、本学科の学生たちは保育現場のニーズにも応えうるといえるであろう。ほか、中央値を超えたのは、【児童福祉】のみであり、残りの科目はほとんど中庸に位置していた。ただ、【小児栄養】は目立って低く(2.1点)、最もなじみがない科目であることが明らかとなった。筆者は、非常勤で通信制の大学生にカウンセリング心理学を教えているが、学生のなかには栄養士の資格を持って仕事をしている者が多くいる。彼らからみると、カウンセリング心理

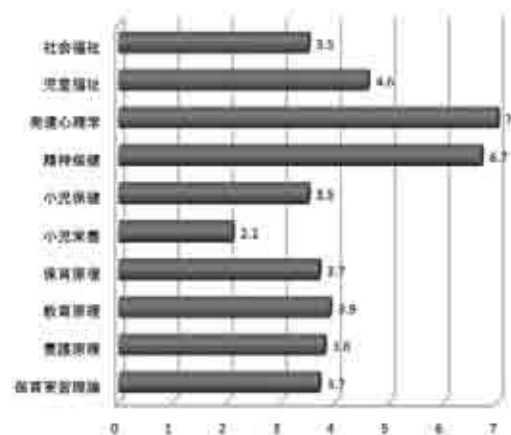


図1. 試験科目のなじみのある程度

学は、“栄養カウンセリング”という分野でもなじみがあり、決して疎遠な専攻同士ではないともいえる。今後、栄養学についても食育・摂食といった形での臨床心理からのアプローチを試みれば、より本学科の学生たちにも親しみもてるかもしれない。

以下、質問項目ごとに結果を示し、筆者の体験も含めた考察を述べる。

「受験の動機」

『将来子どもと関わる仕事に就きたいと考えたとき、保育士の資格が必要だと思ったから』(6名)が最も多かった。職場として保育所を希望する者も1名いたが、多くは、その他の児童福祉施設での就職を希望していた。また、臨床心理士とダブルで取得することで進路の可能性を広げたいと考えている者もいた。

『保育士は保育所で働くときだけに必要な資格』と受け取られがちだが、臨床心理学を学び、その他の児童福祉施設での就職にも保育士資格が役に立つと知ったときに資格取得のモチベーションがアップするように考えられた。

「資格取得の計画」

今年の受験が1年目でも2年目でも、『来年には取得したい』と考えている者が最も多かった(8名)。

もちろん、受験前には今年のうち資格取得しようと考えていた者がほとんどだったように思う。だが、まだ学生の期間が残っていたり就職までに猶予があったりする場合には、その期間を最大限に生かし、計画的に取得しようと考えているものと思われる。

「試験科目の得意・不得意」

得意な科目・苦手な科目については、図2、3の通りであった(複数回答あり)。

得意科目の【発達心理学】や【精神保健】については、『大学の授業で勉強したから』という理由が多く、【児童福祉】については、『もともと関心がある分野で学習しやすかった』という理由であった。苦手科目は6割が【小児栄養】であった。『全くの専門外』、『暗記すべき事項が多すぎるため』という理由で挙がっていた。実際の試験会場でも、【小児栄養】の時間だけは、机や椅子が増え、受験生が非常に多かった記憶がある。臨床心理学の専攻だからというだけでなく、なかなかクリアしにくい科目として存在しているともいえるのではないだろうか。

「2010年筆記試験の感想」

『問題集や過去問とは全く違う傾向のものが出たり、細かすぎたりしたので戸惑った』、『マークシート方式なので、ある意味、運のようなも

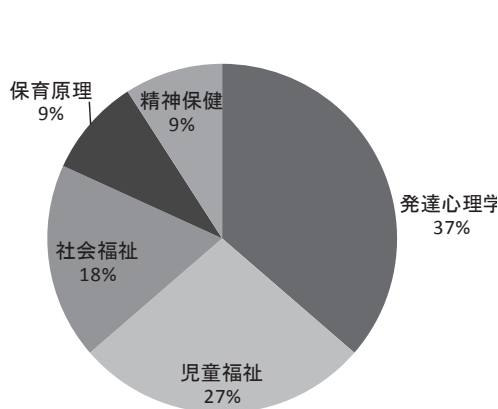


図2. 得意科目

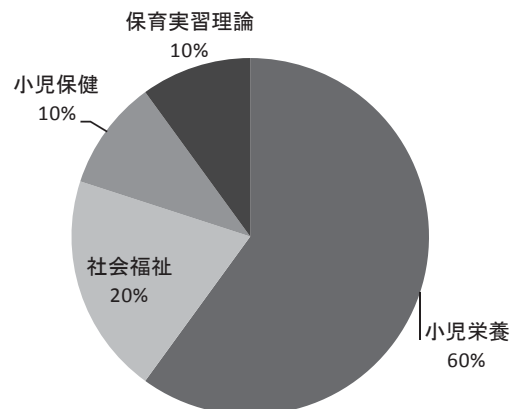


図3. 苦手科目

のも関わってきているように感じ恐ろしかった』、『夏の暑い時期だったので過酷だった』、『あと1問で合格のものばかりで悔しい』といった大変さを味わった感想が多かったなか、『少ない時間のなかでも半分合格できたし、得られた知識も多かったのもので、結果的には良かった』、『勉強会メンバーとみんなで受けた感じがあって良い思い出』、『簡単だった』というポジティブな感想も持たれていた。『久々に全力で勉強したので達成感がすごかった』という感想もあったが、筆者は達成感というより、消耗が激しく2日間で疲労困憊してしまった。全科目を受験する人は1年目のときしかほとんど無いだろうが、体力勝負のところもある。実際の試験内容は、感想にもみられたとおり、ちょっとひねった出題の仕方がされていたり、細かすぎて混乱するような問題が多かったように思う。大きな会場だったため、筆者は2日間ともメンバーにはひとりも会えなかったが、それでも一緒に受験している仲間がいる心丈夫さが支えになっていたように感じている。

「勉強会の感想」

まずは、『勉強内容が頭に入り、とても良かった』、『分からないところを聞く相手がいたので助かった』、『勉強会そのものにはなかなか出席できなかったが、プリント類がもらえて多くの問題を解くことができた』といった学習面での感想が聞かれた。各回の担当の学生が、どこが重要で重要でないか、何をどのような形式で覚えると良いかについて教えてくれると、その科目内容が図と地の関係のように浮かび上がってくる。そのおかげで勉強の仕方が分かり、ひとりでも勉強を進められたということがあったであろう。また、どの学生も自分の本分と並行しながらセカンドで勉強しているのであるから、いずれかの科目を担当して勉強会をリードする役回りは、相当な負担だったであろう。しかし、

その役回りを積極的に担当することで、その科目を熱心に勉強することにもつながり、結果的にはその人の自信につながっていったように思われる。また、『情報交換したり、お互いに励まし合えたことで救われた』、『ひとりだどつい怠けてしまったりするが、一緒に頑張っている人がいるとすごく励みになった』、『心強いモチベーションが上がった』といった精神面で支えになったという感想が聞かれた。筆者自身のことについていえば、特に【保育実習理論】での音楽の知識がなく、テキストを読んでも全く頭に入らなかった。しかし、ピアノの得意な学生に丁寧に教えてもらったおかげで理解することができ、その後からは、逆に得意分野のひとつになったくらいであった。時間割がそれぞれ違い、いつも少数数での勉強会であったが、出られないことや出なくてはならないことを負担に思うのではなく、そのような場を積極的に活用しようと考えていることで、勉強会の意義は大きかったように思われる。

「本学科の学生が保育士を取得することについての意見」

後進の学生たちにエールを送る意見が多く、ここにすべて記載する。

『保育士の資格を取るとはよいと思う。子ども全体のことについて学べ、より深い理解ができる』、『心理をやっている子どもと関わりたいという学生は、保育士をとっていると動ける範囲が一気に広がると思う。教員免許でも良いかもしれないが、福祉領域の場合、また、学部卒で就職しようという人にとって、とても有効な資格だと思う』、『臨床心理学の専門性を発揮できる場として、子どもに関わる職場はたくさんある。そういう場で働きたいと思っている学生にとって、保育士の資格を取っておくことは知識を増やす意味でも大事なことだと感じる』、『子どもに興味がある人は是非挑戦して欲しい』

と思う。PSWの関連科目や臨床心理学を学んだ人が保育士資格を持つことで、子どもとより関わることができ、社会の役に立つことができると思う。国家試験と聞くとすごく難しく思えるが、意外にそんなこともないので挑戦してみる価値は大ありだと思う』、『子どもの心もとても複雑な世の中なので、保育士として仕事をするとときに臨床心理学は大きな武器になると思う』、『ストレス社会のなかで、今後も臨床心理学を学んだ保育士は必要になってくると感じる』、『今回知識を得たことが、実際の臨床場面でも生かせるのではないかと考えている』、『保育を学ぶことで心理に生かせるし、またその逆もあると思う。保育士を取得する人が増えていけばいいなと思う』

以上から、臨床心理学を専攻していることで得られた視点が、よりよい保育につながるという思いが、それぞれの学生に強くあることがうかがわれ、そのような質の高い保育士を目指そうとしているところに彼らのモチベーションの高さがあることが明らかとなった。

「保育士以外の関心のある資格について」

保育士以外の資格・免許で関心のあるものを複数回答してもらった結果を図4に示した。京都文教大学・大学院で取得・養成可能をうたっ

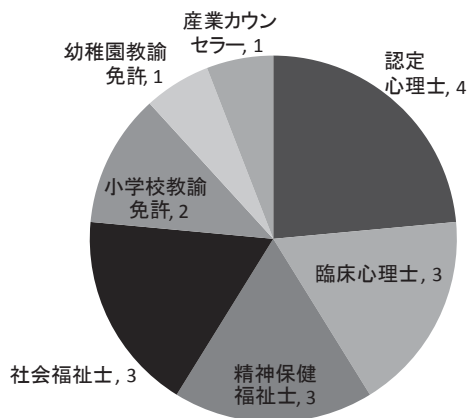


図4. 関心のある資格・免許

ている「認定心理士」、「臨床心理士」、「精神保健福祉士」が上位に挙がった。しかし、学生たちは決して資格マニアというのではなく、あくまでも必要なものを取得したいと考えているのであり、『保育士以外なし』と答えた者も2名あった。“はじめに資格ありき”の大学教育では、学生たちも進路に迷うことなく当然のように資格取得に励むかもしれないが、彼らのように専攻を通して改めて必要な資格に気づき、自分たちで主体的に挑戦するというのはごく自然なスタイルで、望ましいあり方といえるのではないだろうか。

なお、実際の試験の合否については、2年目受験の1名が筆記試験をすべてパスし、次の実技試験も合格して、めでたく今年のうち資格を取得した。しかし、それ以外のメンバーは、まずは筆記試験科目のいくつかの合格を獲得した形となった。プライバシーに関わるのであまり詳細には報告しないが、なかでも【発達心理学】と【小児保健】は合格者が多かった。【小児栄養】は、例年に劣らず非常に難解さを増し、突破した者はごく少数に留まった。筆者はといえば、その【小児栄養】で問16が『選択肢Aが曖昧な表現であることから、受験者全員を正解とします。』という処置があったおかげで、なんとか6割をとることができ、実技試験も勉強しあえる仲間がいたおかげで合格することができた。

Ⅲ. 総括

合格したものの、ではすぐに保育園などで保育士として勤める技量が備わっているか、というと、とてもそのような自信はない。というのは、実習をおこなっていないからである。ここまで保育士試験の良い点を中心に述べてきたようにも思うが、保育実習が明らかに欠落してい

ることも明記しておかねばならないだろう。逆に養成学校であれば、実習にこそ重きを置いて丁寧な指導がなされるのであろう。実際に資格を持って務めるとなると、採用試験という関門がある。そのときに保育士試験で通過した者ほど、ボランティアやアルバイトなどで場数を踏み、現場を知っておくことが求められるであろう。

以上、保育士養成系の大学における学生やカリキュラムについての研究が多いなか、見過ごされがちな保育士試験のほうに焦点を当て試験内容や受験生について、特に臨床心理学との関連から考察した。保育士に求められる資質として、子どもを見立てる力や子どもや保護者の心理を理解することができるが見いだされ、臨床心理学との関連の深さが浮き彫りになった。本学部の学生たちが、保育士受験に臨むのはもっぱら進路のためであり、臨床心理学の知識も兼ね備えた、より質の高い保育士を目指していることが明らかとなった。

福祉的視点にたつ保育士と教育的視点にたつ幼稚園教諭という立場の違いもあるが、これらの保育者に心理的視点も加えられたら、確かによりよい保育が目指せるであろう。もちろん、保育所・幼稚園にも保育カウンセラー・キンダーカウンセラーという形で、心理士が参入していくことがこれからさらに望まれるところであり、筆者も大いに期待している。しかし、そのような専門家を上手に活用できるのも、保育者に心理的視点があつてこそといえるであろう。保育士が、保育現場で醸成してきた技量や“保育士らしさ”を損なうことなく、今を生きる子どもたちのニーズに見合った対応を臨床心理士とともに構築していけるのが理想である。

一方で、今回筆者は受験をして改めて、子どもに関するあらゆる法律や行政がおこなっている制度・置かれている施設などについて知識を

蓄えることができた。さすが保育士は、国家資格でもあり、また臨床心理士より長い歴史のある職域ならではのことがあると感心した。子どもに関わる臨床心理士なら、独学でもこれらの知識は是非身につけておきたいと思うものばかりであったし、今後、大学教育・大学院教育のなかで学生たちに還元していきたいと考えている。

筆者は、教員という立場にありながらも、勉強会の講師の力量はまるでなく、会を運営するだけで精一杯であった。学生たちが、それぞれ目的を持って同じ試験に臨む態度が本当にピュアで、受験勉強の間にも彼らの成長を感じ、頼もしい存在であった。試験の合否はともかく彼らのがんばりを遺し、後進に伝えたいという思いで執筆した。先述した「本学科の学生が保育士を取得することについての意見」と同様、筆者も本学部は、いわゆる保育所（園）のみならず、それ以外の児童福祉施設で勤務できるような学生を十分に輩出できる素地をもっていると考える。これから、本学部は転換期を迎えようとしている。展開期といってもよいかもしれない。それは、大学としての将来構想からの発信であるが、その影には、先輩学生たちのこのような密やかな挑戦が（今年に限らず、これまでも脈々と）あったことを忘れたくない。

謝辞

保育士試験勉強会の仲間たちに感謝します。また勉強会開催にあたりましては、本学教育支援課のご支援もいただきました。あわせて感謝申し上げ、本論文をもってご報告に代えさせていただきます。

文献

浅見均 2000 保育者の資質に関する一考察 青山学院短期大学紀要 54, 121-150.

- 江田美代子 2007 保育士に求められる資質能力に関する調査研究 宮崎女子短期大学紀要 34, 31-46.
- 藤村和久 2010 保育士, 幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 大阪 樟蔭女子大学人間科学研究紀要 9, 129-143.
- 早坂佳恵 2007 保育園における「気になる子」の行動及び保育士の対応についての臨床 心理学的考察-アタッチメント理論の視点より- 北海道医療大学心理科学部研究紀要 3, 151.
- 笠原正洋 2004 保育園児の保護者が子育ての悩みを保育士に相談することに何がかわっているのか 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 36, 25-31.
- 永井晶子・松田博雄・加藤英世・林幹康・佐伯裕子 2003 子どもの虐待に対する保育士・幼稚園教諭の意識と対応に関する研究 杏林医学会雑誌 34 (4), 391.
- 斉藤裕・吉見昌弘 2001 保育者に求められる専門性に関する研究-現場の保育者に求められる専門性と保育士試験科目の比較検討- 日本保育学会大会研究論文集 54, 786-787.

- 田村隆宏・浜崎隆司・岩崎美智子・荒木美代子 2004 子育て支援活動の影響に関する保育者の認識-保育者に対する影響を中心に- 鳴門教育大学研究紀要 教育科学編 19, 91-100.
- 矢持九州王・白石正子・村上玲子・富田輝美・谷川和子・坂之上智子・伊藤順子・近藤鉄 浩・野田令子・管田貴子 2003 4年制大学での幼稚園教諭・保育士養成は求められているか (3); 幼稚園・保育園の採用についての意識調査 日本保育学会大会研究論文集 56, 872-873.

URL

- 厚生労働省 web 第4回保育士養成課程等検討会参考資料4 (平成22年2月9日)
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0209-7j.pdf>
- 厚生労働省 web 「保育士試験の実施について」の一部改正について (平成21年11月9日)
<http://www.hourei.mhlw.go.jp/hourei/doc/tsuchi/T091106N0030.pdf>
- 社団法人 全国保育士養成協議会
<http://hoyokyo.or.jp/>

Abstract

A Study on Earning the Qualification of Hoikushi for Clinical Psychology Majors

Mayumi MITSUBAYASHI

Hoikushi is a national qualification for skilled nursery teachers in Japan. There are two ways to get this qualification: one is by completing a graduate course, the other by taking a national examination. The students in this department become qualified by taking the examination.

In this paper, the writer first introduces the contents of the exam and discusses the nature of the nursery works as well as the relationship between the nursery teacher and clinical psychology.

The Hoikushi Examination consists of a written test and a practical test. The written test contains 10 content-rich subjects. The quality which is necessary to Hoikushi has been found to be able to get the clinical judgment of children and to understand the psychology of children and parents. Moreover, the close relationship between Hoikushi and clinical psychology has been clarified.

Recently, the writer started a study group for helping students to get the qualification of Hoikushi and students worked hard to learn. After the examination, they cooperated in the investigation by questionnaires. As a result, they were neither familiar with "Child Nutrition," nor were they good at it. But they were familiar with "Developmental Psychology" which was a favorite subject for them. The purpose for students of this faculty to pass the examination is to find employment. They are aiming at a higher quality nursery teacher with the knowledge of clinical psychology.

It is recommended that anyone who works with children should take the Hoikushi examination. It is very preferable in the future that the Hoikushi acquisition becomes possible in our faculty since our department is planning to develop more and more. Though this has been developed by KBU clinical psychology professors, we should not forget those senior students' secret challenges in the shadow.

Key words : Hoikushi, Clinical Psychology, Questionnaires